

「似合い」の様相 —被服の色彩に関して—

小林 政 司

0. はじめに

現在の衣生活を考えると、住空間におけるエアコンディショナーなど温熱制御設備の普及により、屋内では衣料の季節感が減少し、なおかつ従来に比し薄着をする傾向が認められる。さらに今後、技術面での進展により、衣料の高機能化と同時に薄着傾向のさらなる助長が予想される。また、これらにより、デザインに対する制約が減少することが予想され、被服の社会的・心理的機能がより重視されることになる。[1]

一方、被服の選択、使用行動のについての被服行動尺度 [2] に「適切性尺度」が採りあげられ、また被服の購入時に知覚されるリスク [3] には「着こなし懸念」が因子として抽出されている。これらは、購入や着用時に行われる、自分の着用する、または着用している被服が、T. P. O. に適合するのか、あるいは自分自身に似合うのかなどへの配慮の必要性、およびその重要性を示すものと考えられる。

本稿では、「似合う」ことを「似合い」と呼称することとし、「似合い」、とくに被服の色彩に関する「似合い」を探求する初段階として、「似合う」色の学術的な取り扱い手法に関する提案を行うとともに、現在知られている「似合う」色の選択、いわゆるファッションカラーコーディネーションについてのいくつかの手法を概観し、研究の端緒としたい。

1. 被服の視覚的評価

生態光学あるいは生態学的視覚論 [4] の立場から見ると被服には、一般的な道具と同様、身体への価値付随性能 (capacity to attach something to the body; 著者訳) を有する。これは「ヒト」と「環境」との「境界」がヒトの皮膚表面に固定したものでなく、位置を変えうるものであることを意味する。一般的な道具では、それを使用しているときには、いわば手の延長であり、ほとんど手の付属品、あるいは使用者自身の身体の一部であって、したがって、もはや使用者の環境の一部ではない。[4] この点に関しては、他の道具に比較して被服の効果はきわめて明確である。被服は、着用および着用者の身体を環境から完全に、あるいは不完全に遮蔽するというアフォーダンス (affordance) を有すると同時に、それには着用者の身体表面の色やテクスチャー (texture) を変化させる能力がある。すなわち、着用前の被服は、単に環境の遊離対象に過ぎないのであるが、いったんヒトに着用されることによって、身体に付属するものとなり、もはや環境の一部ではなくなる。そして、元の境界とはまったく性質の異なった新たな境界を作り得る訳である。

そのおかげで、被服着用の目的あるいはその効果のひとつに、着用者に対する視覚的評価の変化をあげることができる。この際の視覚的評価とは単に美しさや調和など審美的要素にかかわるだけでなく、着衣（着用した被服）から連想される社会的地位など主観的要素をも含めたきわめて多元的な評価であり、さらに評価者が着用者と被服以外に存在する第三者的评价（他者評価）の場合もあれば、着用者本人が評価者となる、すなわち自己評価の場合もあり得る。

ここで視覚的評価の対象を考えると、被服のみあるいは着用者のみではなく、先に述べたように、当然、被服とその着用者の組み合わせとなる。しかし、被服の成立はきわめて人為的であり、さらにその選択および着用に関しては、非常に高い確率で着用者自身の、これもやはり人為的行為である。それゆえ、評価の受容者は着用行為を行ったものすなわち多くの場合、着用者自身となる。このことが、被服の着用時に、さまざまな配慮を行うことを着用者に強いる結果となっている。視覚的評価のひとつに、「似合う」あるいは「似合わない」との評価が存在するが、この種の評価においては、主体としての着用者が存在し、被服がそこに付随して新しい境界を形成するというように、主従の関係が明確であるため、主となる着用者の評価に対する心理的負担はより大きくなると予想される。また、これが「似合い」への関心の高さの一因と考えられる。

2. 「似合い」の定義

磯井 [5] は「似合い」の定義を次のように述べている。洋服を着る人（着用者）と洋服（被服）の組み合わせを評価する「似合う」あるいは「似合わない」は、着用者と被服の組み合わせの特徴を言語で表現したものである。事物の特徴を言語で表現したものは「概念」とよばれるから、「似合う」という評価も概念と考えることができる。概念は事物を分類する基準（評価基準）が明確なときに形成される。従って、「似合う」程度を判定する人（判定者）は、自己の「似合う」概念に照らし合わせ、一致すれば「似合う」と評価し、別と考えれば「似合わない」と評価することになる。

ここに見られるように、「似合い」が問題となる分野は、ファッション（被服と着用者）に関するものがきわめて多く、一部にメイク（化粧方法）やヘアカラー、ヘアスタイルに関連するものが認められる。ここで、被服だけに「似合い」の対象を限定しても、その視感的要素は、素材、形態、色柄などきわめて多岐にわたり、さらに、外的な要因との適合性までも問題にすると、これらを統括的に取り扱うことは、きわめて困難である。そこで、後に扱うファッションカラーコーディネート的手法では、着用者の肌の色と被服の色とに的を絞り、組み合わせた場合に肌の色が「美しく」見える被服の色を「似合う」色としている場合が非常に多い。ただし、着用者と被服の組み合わせにおける色彩のみを扱うことは、「似合い」の評価における必要条件を見出すことができるが、これは決して十分条件でないことを、まずは認識しておく必要がある。

3. 「似合う」色の色彩調和論的取り扱い

福田は、色彩調和論に関して、「確かにいくつかの色の組み合わせには、快い感じを起こさせるものもあれば不快な印象を与えるものもある、というのは経験的な事実である。しかし、残念

ながらそこにどのような法則が働いているのかということについては、これまでのどの調和論も万人を納得させるような回答を示してはくれなかった。」[6, 7]と述べている。しかし、色彩の調和と「似合い」には、組み合わせについてなされる評価という点で共通性があり、「似合い」を着用者の肌の色と被服の色との「似合い」に限定すれば、「似合い」の評価に色彩調和論を応用できると考えられる。ここでは、色彩調和論の実情を示す例をいくつか見てみたい。

P. Moon と D. E. Spencer は 1944 年に「色彩に関する科学的な裏づけのある包括的な理論をつくること」を目的とした 3 編の論文を発表した。基本的には、組み合わせられる各色の色空間内の座標および座標間の距離の簡単な演算から、美度と呼ばれる数値を算出し、調和感の程度を予測しようというものである。しかし、計量心理学的なその後の研究成果からみると、この理論の価値は高くないとされる。配色見本の美度とその調和判断の実測値とは、ほぼ無関係になるようである。したがって、自然科学的な方法論によって包括的な調和論を作ろうとした試みは、歴史的には意味があるが、予測性に乏しく実用性はないとすべきであるといわれている。[6, 8] 繰り返しになるが、少なくとも日本では、彼らの理論が、色彩調和論として実用性に疑問がもたれていることを確認するため、ここであえて採りあげた。

納谷らの研究では、102 の 2 色配色について、Scheffe の一対比較法によって調和判断（こころよさ）を求めた。その結果に基づいて、2 構成色の色座標値および 2 色間の式差とから調和判断を推定する重回帰式を求めている。この相関係数 R は、0.87 と比較的高いといえるが、11 の指定変数を有する複雑な構造である。すなわち調和感には重回帰式で示すことができる法則があるが、それは 11 の指定変数をもつほどにきわめて複雑であるということである。ちなみに、11 の指定変数は、2 構成色の物理量すなわち Munsell の Hue, Value, Chroma の関数である。[6, 9]

このような色彩調和論を、たとえば着用者の肌の色と被服の色とに適用すれば、それらの調和すなわち「似合い」の評価について比較的簡便に指標を与えることができる。ただし、先に述べたように、色彩調和論そのものの不安定さから絶対的な評価基準は示し得ないと考えられる。

一方、D. B. Judd は、古今の色彩調和論を読破し、さまざまに異なる見解のなかにも共通の考え方があることを発見し、それを次の 4 つの原理に要約した。[6, 7]

- 1) 秩序の原理 (principle of order)、
- 2) なじみの原理 (principle of familiarity)、
- 3) 類似性の原理 (principle of similarity) または、共通性の原理 (principle of common elements)、
- 4) 明瞭性の原理 (principle of unambiguity)

このうち類似性あるいは共通性の原理は、互いに何らかの共通要素を持つ色同士は、互いに類似性が生じることによって調和しやすいと説明されているが、後に扱うファッションカラーコーディネートの手法の多くは、この原理に当てはめることができる。

4. 「似合う」色の視覚心理学的取り扱い

着用者は同じ人物でいながら、着用する被服によって「似合う」あるいは「似合わない」という評価を受ける、すなわち、評価の変化が認められるということであれば、これを一種の錯視ととらえることはできないであろうか。錯視に関しては視覚心理学の分野で詳細な検討が行われている。[10-12] R. L. Gregory は、知覚が外界と異なるとき、言い換えると近くが物理的現実と一致しないとき、われわれは「錯覚を経験する」というとし、錯覚を曖昧性、視覚的歪、逆説、虚構に分類することを試みている。

一方、対比現象については、色知覚あるいは明るさ知覚の特性として扱われているようだが、対比現象により物理的に同一の色が異なって見えるわけであるから、これも先の錯覚の定義に当てはめることができよう。ファッションカラー編集部によるファッションカラーレシピ (Fashion Color Recipe) [13] では、「着ている洋服の色によって、肌色が違って見えるのはなぜだろう？」ということから対比効果を応用して、「自分の肌色をきれいに見せ、おしゃれな印象を与えるベースカラー（主に洋服の色）を探し出せる」と謳っている。ここでは、ピンク系、ナチュラル系、オークル系、ブロンズ系の4種12色の肌色とベースカラーの配色例が、一部イメージ調査の結果とともに示されている。

また、視覚心理学の分野では、図と地の分化を視知覚における最も基本的な構造であるとしている。真っ暗闇や霧の中や青空のような一様な視野では、何も認められない。暗闇や霧の中に形がぼんやりとでも見えるためには、そこには周囲とは異質なものが何かなければならない。わずかな明るさや色のちがいがあるときに、そこに形がおぼろげに見え、物の存在に気づくのである。これが図と地の分化の起こりであり、異質の部分が図に、周囲の等質な領域が地となる。この図と地の分化に関する研究は、E. Rubinにより始められ、彼によると図と地の現象的差異は次のようなものである。[11]

- 1) 図となった領域は形をもつが、地となった領域は形をもつとは言いがたい。また、それまで地であった領域が図となると、何か新しいものが付け加わったという印象を与える。
- 2) 2つの領域を分ける境界線は、図となった領域の輪郭線となり、図の領域の末端として図に所属し、地の領域には所属しない。
- 3) 地は図の背後まで広がっている印象を与える。
- 4) 図は物の性格をもつ。地は材料の性格をもつ。
- 5) 図になった領域は地になった領域にくらべて、より豊かな、より分化した構造をもち、一つ一つの領域が個性的である。
- 6) 地として現れた場合よりも、図として見られた場合のほうが、色がかたく、密で、定位が確定的である。
- 7) 通常、図は地の前方に定位する。
- 8) 地よりも図のほうが圧迫的で意識の中心となりやすい。

これらは、日常的に経験していることであるが、Rubin以前には、このような明確な形で表現されたことはなかった。また、着用者と被服そしてその背景すなわち環境について、図と地の

関係を考えてみると、環境は、地、被服は、図となり、着用者は、とらえ方によって図、地いずれにもなり得る。すなわち着用者を被服と一体としてみれば図、さらに被服と独立してみた場合には、被服とは別の図、あるいは被服に対する地となるわけである。しかし、たとえば被服の色によって、これらの図と地の関係が崩れるような事態が発生すれば、これは「似合っていない」との判定を下されることになるであろう。

5. ファッションカラーコーディネートのエレメント

ここでは、着用者の肌の色と被服の色とに的を絞り行われているファッションカラーコーディネートのエレメントとして、評価基準となる肌色や、直接あるいは間接的に利用されている、配色理論、イメージスケールについて見てみたい。

5.1. 理想の肌色

「似合い」の判断基準を、着用者の肌の色と被服の色におき、着用者の肌色の美しさを問うのであれば、これは理想の肌色の存在を暗示する。

日本工業規格の「物体色の色名」[14]には、「肌色」が含まれており、「対応する系統色名による表示」では、「薄い黄赤」、「代表的な色の三属性による表示（参考）」では「5YR 8/5」と記されている。

日本色研事業の「新配色カード」[15]では、PCCS (Practical Color Coordination System)の準抛色以外に肌色 (Flesh) 系として「FL-1」～「FL-6」のカードが含まれている。「FL-1」～「FL-3」はピンク系 (赤みの肌色)、「FL-4」～「FL-6」はオークル系 (黄みの肌色) とされているが、規準となる肌色は特に与えられていない。

また、ファッションカラーレシピ (Fashion Color Recipe) [13]では、先に示した12色に加えて「健康的な肌色 (2.5 YR 6.5/4.5)」、「理想的できれいな肌色 (1.5 YR 7.5/3.5)」、「青白い肌色 (10.0 YR 7.5/2.5)」の3色がいずれも参考ながら () 内に示した修正マンセル値とともに示されている。ただし、これら肌色の出典は、明らかでない。

一方、鈴木と棟方 [16]は、肌色の分析を行う際の心理的基準の解析を行うため、60色の肌色を評価者に2群に分割させ、その判断がメトリック明度に基づく赤み - 黄みの基準で行われたとしている。

なお、肌の色そのものに関しては、皮膚の固有色、血液透視の色、皮膚色素などから構成されており、これらに関しては医学的見地からの検討が必要になる。また、人種や年齢、性別、あるいは身体部位や季節によっても異なるため、肌色モデルの選定には注意が必要であり、同時にこれを「似合い」の判断において基準とすることの不安定性を認識しなければならない。

5.2. アンダートーン (under-tone) による配色

1928年、Robert Dorrが考案した、カラーキー (color-key) による配色選択法が発表された。これによると無彩色も含めすべての色には、必ず黄か青か、どちらかのアンダートーン

(under-tone) があり、同じアンダートーンの色同士による配色は調和するとされている。その2つの類型すなわちイエローアンダートーン (yellow under-tone, Key 1) とブルーアンダートーン (blue under-tone, Key 2) を現実を示した代表色の見本がカラーキーである [17]。ただし、この Dorr の理論の基礎には、色刺激の分析があるだけで色覚理論が欠けているとされる。[6] 次章で見るように、現在カラーリスト、カラーアナリストと称する者によってなされているファッションカラーコーディネーションの手法にはこの Dorr の理論がベースとして非常に強く影響している。特に、カラーキープログラム (ブルーベース/イエローベース・カラーシステム) は、まったくこの Dorr の理論に立脚している。

5.3. カラーイメージスケールによる配色

日本カラーデザイン研究所 (小林重順主宰) のイメージスケール (image scale) では、色のさまざまなイメージの共通要素を配色の基礎としている。実際には多数のイメージ語によって SD 法に基づいた調査を行っているが、イメージスケールと称する「ウォームクール」、「ハードソフト」という独自の2次元座標上 (場合によっては、「クリアグレイッシュ」をあわせた3次元座標上) に配色がプロットされている。[18-20]

このうち、「ウォームクール」に加え「ハードソフト」の因子を採用し、平面座標を構成する方法は、次節で取り扱うカラーコーディネーションの手法において、肌の色や被服の色を分類する際に採用されている方法と同一である。

6. 一般書籍に見るファッションカラーコーディネート

ここでは、「似合う」色あるいはカラーコーディネートに関して市販されている書籍の中から一般書店の店頭で入手が容易なもの、比較的刷数が多いなど、一般に受け入れられていると予想されるものを概観し、ファッションカラーコーディネートの実情に迫る。このなかには、明らかに「似合い」の観点に誤解を招く表現のあるものも含まれており、これはここで指摘しておきたい。また、記述内容の厳正を期すため原文はかぎ括弧でくくってそのまま引用し、引用個所を明記した。この際、各書籍の扱うファッションカラーコーディネートの手法には、それぞれ名称があり、これを略号化して示す。

略号は、次のとおり。

CKP：カラーキープログラム (color-key program) [17]

CMS：カラーミーアシーズン (color me a season) [21]

CMB：カラーミービューティフル (color me beautiful) [22]

CMF：同上、ただし、文献名カラーミーファッショナブル (color me fashionable) [23] を採った

PCS：パーソナルカラーシステム (personal color system) [24, 25]

6.1. 成り立ちについて

「カラーアナリストの歴史は意外に古く、第二次世界大戦中の一九四〇年代のはじめごろから

アメリカに存在していました。」(CMS, p. 32, l. 2)

「似合う色や、その人の個性に合ったスタイルをアドバイスするイメージコンサルタントという職業は、1959年、ケネディーとニクソンの選挙戦のときに確立されたといわれています。」(CMF, p. 3, l. 2)

すなわち各手法が開発される以前から、カラーコンサルタントやカラーアナリストなどの存在は認められたということである。予想の域を越えないが、Dorrの発見は1928年とされているので、このころの手法は彼の理論によるものと考えられる。

6.2. 手法の開発について

「一九七九年にメイクアップ・アーティストであったバーニス・ケントナー女史が、十年の歳月をかけて肌質とメイクやファッションなどの関係を明らかにして、各人のベストカラーを見つけるための『カラーミーアシーズン』というカラーアナリシスのマニュアルブックを出版したところ一大ベストセラーとなり、爆発的なブームが起きました。」(CMS, p. 32, l. 7)

「ドイツの色彩学者、ヨハネス・イッテンの『主観的色彩特性』論に啓発されて、独自の四季のパレットを作り出し、最初はホームタウンのバージニアでささやかにスタートしたキャロルの仕事でしたが、ヘルプ・ピープル（お金もうけよりも、みんながハッピーになればいい）というやり方だったためか、口から口へと伝わって、あっという間にアメリカ中に広がりました。」(CMB, p. 123, l. 10)

「1981年アメリカ女性、キャロル・ジャクソン著の『カラー・ミー・ビューティフル』が、大ベストセラーになり、一部の人のためだったカラー分析が、急速度で一般に広まる結果になったのです。」(CMF, p. 3, l. 4)

少なくともここに挙げた3例（ただし、後者2例は同一）は、それぞれ個人が独自に開発した手法であることを強調している。なお、先にあげたカラーキープログラムでは、Doorの理論に基づき1970年代にファッション分野への応用を試みている。

6.3. 評価の基準について

「生まれながらにして、ブルーの色素をより多く持っている人と、イエローの色素のほうをたくさん持つ人がいる。それが、髪や肌、目、唇、爪、歯などにアンダートーンとして現れ、その人のパーソナル・カラーを決めているのです。」(CKP, p. 75, l. 13)

「カラーミーアシーズンのカラーアナリストは、人の肌質を春、夏、秋、冬の四つのシーズンに分類し、それぞれのシーズンの人に似合う色の見本帳（カラーファン）を渡し、その見本帳にある色に近い洋服を選ぶようにアドバイスしています。」(CMS, p. 42, l. 2)

「自分に似合うカラーグループを知るためには、自分の肌、目、髪の色を知る必要があります。」(CMF, p. 3, l. 10)

「似合う色というのは、その人が持って生まれた肌の色を、より健康的に若々しく生き生きと輝かせてくれる色のこと。」(PCS, p. 50, l. c., l. 13)

いずれも、着用者の肌の色を評価基準とし、これに、髪の色や目の色などを加味する場合があると述べている。

6.4. 分類の方法について

「どちらかといえば皮膚が黄みがかっている人をウォーム系（春か秋のシーズン）、逆にどちらかといえば皮膚が青みがかっている人をクール系（夏か冬のシーズン）と呼んで分類しています。」（CMS, p. 20, l. 12）

「まず、人間の肌色を大きく2つに分けて考えることからスタートしましょう。肌の色、その赤身は基本的にピンク色をしています。ピンクには、少し黄みのあるサーモンピンクと青みのあるローズピンクがあります。サーモンピンクは赤と白を混ぜたピンクに黄色が入っているので、イエローベース、一方ローズピンクは赤と白を混ぜたピンクにブルーが入っているので、ブルーベースといいます。」（CMF, p. 16, l. 8）

「カラー・ミー・ビューティフルでは、あなたがより似合う色を見つけることができるように、イエローベースをさらに2つ、ブルーベースをさらに2つのグループに分けています。」（CMF, p. 17, l. 4）

「パーソナルカラーでは、一般にオークル系、クリーム系といわれる黄みを感じる肌を『ウォーム系の肌』、ピンク系といわれるピンクを感じる肌を『クール系の肌』とよんでいます。」（PCS, p. 51, l. c., l. 14）

「さらに、同じウォーム系の肌の人でも、深い色、濃い色、色が黒くマットな肌色の人を『ハードタイプ』に、また浅い色、明るい色、色が白くクリアな肌色の人を『ソフトタイプ』に大きく分けることにします。そしてクール系の肌の人も、肌色によって同じように分けると、肌色は4つに分けられます。」（PCS, p. 53, l. c., l. 4）

先に述べたカラーキーププログラムの場合を除き、多くの場合は、「ウォームークール」および「ハードーソフト」の観点から、肌の色を4つのグループに分類する。

6.5. 分類の具体的方法について

「白にも、青みのある冴えた白と、オフホワイトと呼ばれる、黄みを帯びた柔らかな白があります。… 自分のアンダートーンを調べるには、鏡に向かい、自分の顔に二種類の白を交互にあてて比較します。」（CKP, p. 79, l. 16）

「カリフォルニアに本拠のある米国カラーミーアシーズン社では次のようなテストをして、まず一人ひとりのシーズンを見つけだしていきます。」「①ファンデーションテスト、②パーソナリティーテスト、③サブジェクトカラーテスト、④アイパターンテスト、⑤カラードレイピング…三十六枚の色布を胸元にあてて、どのシーズンの色調が合うかをチェックします。」（TC, p. 18, l. 3）

「カラー・ミー・ビューティフルのやり方は、肌の色、目の色、髪の色との調和を見ながら、120色の布を衿元にあて、各人に似合うグループを探していく方法です。」（CMB, p. 3, l. 1）

分類の具体的方法では、どの分類に属するのかを「診断する」との表現が頻繁に用いられている。書籍では、印刷された色見本等を参考に自己診断できるように工夫されているが、多くの場合、種々の色の布を衿元など顔の周辺にあてるという方法を確度の高い本格的な診断法として推奨している。

6.6. 分類の区別について

『春は、明るくて元気にさせてくれるシーズン』『夏は、物静かで落ち着きのあるシーズン』『秋は、物事を成し遂げる実の多いシーズン』『冬は、美とドラマをもたらしてくれるシーズン』(TC, p. 42, l. 8)

「それぞれの季節にそのイメージがあるように、私たちのタイプも〈春〉〈夏〉〈秋〉〈冬〉に分けられるのです。」(CB, p. 3, l. 5)

「それぞれのグループを〈春〉〈夏〉〈秋〉〈冬〉と季節の名前で呼んでいます。」(CF, p. 17, l. 6)

「ウォームでソフトなグループは『春』の息吹を、ウォームでハードなグループは『秋』の実りを、クールでソフトなグループは『夏』に咲くあじさいの花を、クールでハードなグループは『冬』の雪と氷の世界を、というふうに。この4つのグループはぴたりと季節のイメージと重なるのです。」(PCS, p. 55, l. c., l. 1)

カラーキープログラムの場合を除き、いずれも、4つのグループを四季に結び付けている。また、「ウォームークール」および「ハードーソフト」の組み合わせは、まったく同一である。

6.7. 各分類の色に「似合う」色について

「すべての色は『青み』と『黄み』に分けられる」(CKP, p. 68, l. 3)

「その季節のグループ30色が、あなたにお似合いの色というわけです。」(CMB, p. 3, l. 6)

「各グループには性格の似た、約32色の色が集められています。ですから、同じグループの色どろしは組み合わせやすいのです。」(CMF, p. 17, l. 8)

「色をよく見て、見分けていくとすべての色を4つのグループに分類できます。」(PCS, p. 54, r. c., l. 2)

すべて、肌色の分類と同一の方法で、色を分類し、同一の分類同士が「似合う」色であるとしている。すなわち Judd の類似性の原理に従うことになる。また、すべての手法で、カラーサンプルでの色提示が行われている。

6.8. 「似合い」の問題以前に疑問のある記述について

「虹彩のなかには、四つのシーズンを暗示する特徴が隠れています。」(CMS, p. 60, l. 4)

虹彩の紋については、指紋と同様、人物本人の特定、確認に利用されており、誤認の確率も120万分の1程度といわれている [26]。これをシーズン確認の手段の一つとしているが、虹彩の紋の分類と各「シーズン」との相関性の根拠が十分に説明されていない。これでは、いわゆる手

相占いと同様で、きわめて科学的根拠が乏しいものとせざるを得ない。

「こうしたシーズンは遺伝する…」(CMS, p. 172, l. 6)

身体的形質の遺伝は、医学的にも認められており、肌の特質についても遺伝の可能性はあるものと考えられる。また、性格に関する遺伝もある部分では認められている。[27] しかし、この場合、肌質が遺伝した結果として同一の「シーズン」となるのであって、決して「シーズン」そのものが遺伝するのではないと解釈すべきであろう。

「肌質によってそれぞれの気質が違っていることから、人事管理などに役立つ経営者、人事担当者も増加し、人と接することの多いコンサルタント、弁護士、セールスマンといった人たちの間にもライセンスを取る人が増えつつあります。」(CMS, p. 33, l. 13)

この前段の記述内容に関しては、きわめて信じがたい。また多くの読者が疑問を抱くものと思われる、他の記述部分の信頼性をも失墜させる内容である。もし事実なら、ぜひ実例を挙げていただきたいものである。

7. ファッションカラーコーディネートの手法に関する疑問

前節で見たファッションカラーコーディネートの手法に対しては、いくつかの疑問がある。

まず、肌色の分類に関しては、各分類の中間層の処理をどのようにするのか。特定の集団を仮定した場合、肌の色は各属性に関して正規分布をすると考えるのが妥当であると思われるが、この場合、多少のずれはあるにせよ、肌色の分類の境界領域にその集団の大多数が存在することになる。各手法では、分類に迷ったときの対処法が存在するが、たとえば虹彩や髪の毛の色を対象を移したり、「ウォームクール」および「ハードソフト」といった元のイメージの分類とは異なる性格判断のような質問によるなどきわめてあいまいなものである。

次に、「似合う」色の提案を定める際の基本色相はどのように選択するのか。さまざまな色相に、たとえば、「イエローアンダートーン」と「ブルーアンダートーン」の存在を認めているが、基本の色相に関してはその定義が明確でないようである。色光あるいは色材の三原色や心理四原色など特徴的な色相のグループなのか、あるいは各手法に特有の色相なのか、明確でない。また、この分類の際も境界部の色の取り扱いが難しいのではないだろうか。

さらに、どの手法も、カラーサンプルとして各分類の色を提示しているが、広く認められているいずれのカラーオーダーシステムにも則っていないのは問題である。

このように、前節で見たファッションカラーコーディネートの手法には、根本的な部分で解決されていない問題があるようである。しかし、一般には、かなり広く受けいられているものもあり、商業的なプロジェクトでの応用例も少なくない。すなわち、ある部分では、妥当な判断が可能な基準を有する手法であると評価されている。

8. おわりに

以上、「似合い」の探求の初段階として、「似合い」に関して現在行われているさまざまな施策、

研究を見てきたが、色と人間の関係は、感覚生理学的水準、知覚心理学的水準、感情心理学的水準、社会や文化の水準などさまざまな水準で生じている [12] ことが実感できる。

もし仮に、この「似合う」という評価が、きわめて不可解な現象学的イメージ [28] の一種であった場合には、もはや数理的な取り扱い是不可能となる。しかし、C. E. Osgood の統計的手法を借りたイメージ解析の方法 [5] や、M. E. Chevreul が追求した対比現象を応用した試み [13] は「似合い」の定量化に資するところが大きいと期待できる。ただし、これらの手法では「似合い」の判断過程はブラックボックス化されており、「似合い」の本質の理解にはいたっていない。このブラックボックスの解明には興味もたれるが、ゲシュタルト (Gestalt) 心理学が構成心理学に否定的であるように、あるいは反科学的思想が批判する要素還元主義のひとつとして、揶揄されるものであるのかも知れない。

一方、脳機能そのものや視覚と脳機能の関連がより明らかとなれば、「似合い」の判断に限らず多くのクオリア (qualia) の解明につながるであろう。ただ、仮に「似合い」に対する絶対的な評価が形成され、それに変化が無いとすると、被服選択に対する興味はどのようになるのだろうか。これはまた非常に大きな疑問である。

参考文献

1. 中根芳一編、「私たちの生活科学」、理工学社、1995
2. 永野光朗、「被服行動尺度の作成」、繊維製品消費科学、35 [9]、468-473 (1994)
3. 神山進、苗村久恵、田中早苗、高木修、「'知覚されたファッション・リスク' とその低減戦略に関する研究」、繊維製品消費科学、31 [4]、190-201 (1990)
4. James J. Gibson, "The Ecological Approach to Visual Perception", Houghton Mifflin Company, 1979; 古崎敬、古崎愛子、辻敬一郎、村瀬旻訳、「生態学的視覚論 ヒトの知覚世界を探る」、サイエンス社、1985
5. 磯井佳子、「『似合う』評価の判定基準」、繊維製品消費科学、42 [9]、548-553 (2001)
6. 日本色彩学会編、「新編 色彩科学ハンドブック (第2版)」、東京大学出版会、1999
7. 福田邦夫、「色彩調和論 (色彩科学選書 3)」、朝倉書店、1996
8. 近江源太郎、「造形心理学」、福村出版、1984
9. 納谷嘉信、「産業色彩学」、朝倉書店、1980
10. Richard L. Gregory, "Eye and Brain: The Psychology of Seeing, 5th Ed.", Oxford University Press, 1998; 近藤倫明、中溝幸夫、三浦佳訳、「脳と視覚—グレゴリーの視覚心理学—」、ブレーン出版、200
11. 大山正、「視覚心理学への招待 見えの世界へのアプローチ」、サイエンス社、2000
12. 大山正、「色彩心理学入門 ニュートンとゲーテの流れを追って」、中央公論社、1994
13. ファッションカラー編集部編、「おしゃれな色の選び方」、日本色研事業、1999
14. JIS Z8102-1985 (1997)、「物体の色名」: JIS Z8102 : 2001、「物体色の色名」
15. 日本色研、「新配色カード 175」、「新配色カード 199」、日本色研事業、1989、2000

16. 鈴木恒男、棟方明博、「肌色の分類を行う際の心理的基準の解析」、日本色彩学会誌、25 [1]、2-11 (2001)
17. 貞子ネルソン、「新カラーコーディネート術」、現代書林、1994
18. 小林重順、「カラーイメージスケール」、講談社、1990
19. 小林重順、「カラーリストー色彩心理ハンドブッカー」、講談社、1997
20. 小林重信、「実践カラーデザイン」、講談社、2000
21. 桶村久美子、「似合う色がわかる本」、中経出版、1994
22. Carole Jackson、佐藤泰子、「カラー・ミー・ビューティフル」、講談社、1986
23. 佐藤泰子、「カラー・ミー・ファッションブル」、講談社、1992
24. 門田真乍子監修、「カラーコーディネート自由自在」、講談社、1996
25. カラー集団トータリア監修、「COLOR SELECTION『配色上手』できれいになれる」、講談社、2000
26. John Daugman, "High confidence visual recognition of persons by a test of statistical independence", IEEE Transactions on Pattern Analysis and Machine Intelligence, 15 [11], 1148-1161 (1993)
27. 中込弥男、「ヒトの遺伝」、岩波書店、1996
28. Giuseppe Caglioti, 'Eidos e Psiche', Ilisso Edizioni, 1995; 鈴木邦夫訳、「イメージの現象学」、白揚社、2001